

足守庄莊園遺構緊急調査
延寿寺跡第2次発掘調査概報

1979年3月

岡山市教育委員会

序

近年の著しい都市開発は、地域の近代化と都市化を増進させる一方におきまして、伝統文化の喪失・自然環境の破壊・公害等の社会的問題をも派生させています。なかでも、開発に伴う「文化財の保護」は、古代吉備国の中枢地に位置する岡山市にとりましては、宿命的な大きな課題であり、文化財保護・保存行政の中心施策の一つであります。

岡山市教育委員会は、この数年来、文化財の保護と地域開発の調和を図るため、埋蔵文化財の分布調査と各種の遺跡の発掘調査を実施してまいりましたが、つぎからつぎへ押し寄せる開発の波に、埋蔵文化財の保存施策のむつかしさとやりがいを感じ入っている次第であります。

このたび報告する延寿寺跡は、古代の絵図が現存する荘園跡として全国的に著名な備中国足守庄の中核的遺構と見立てられ、広く注目を浴びていました。しかし、県道バイパスの設置とそれに伴うスプロール化現象の進行に基づき、足守庄の荘園遺構、なかならず延寿寺跡の保存対策が緊急の課題になったのであります。このため、岡山市教育委員会では、足守庄荘園遺構の遺存状況の把握と延寿寺の所在確認と内容を明らかにすることを目的とし、文化庁・岡山県教育委員会のご支援・ご指導のもとに分布調査と発掘調査を実施することにしたのであります。

調査にあたっては、諸々の制約を受けながらも延寿寺の所在と年代・その他荘園生活関連遺構の検出及び荘園遺構のいくつかを確認することができたに至ったのは、関係各位のご指導・ご助勢によるところであります。特に、発掘のご無理をお願いした地権者各位、調査対策委員の先生方をはじめ調査従事者各位、ご協力頂いた地元上土田町内会の各位に対して、心から感謝の意を表する次第です。

なお、今後も足守庄荘園遺構の調査を予定いたしておりますので、荘園遺構の調査というこれまであまり類例のない調査でありますだけに、研究者の方々をはじめ関係各位の今後一層のご高見・ご指導・ご助勢を賜わるようお願いいたします。

昭和54年3月31日

岡山市教育委員会

教育長 橋 本 進

例

言

1. この報告書は、岡山市教育委員会が昭和53年12月から昭和54年2月にかけて実施した、足守庄莊園遺構緊急調査に基づく岡山市上土田、延寿寺跡の発掘調査に関するものである。
2. この報告書の作成は、岡山市教育委員会が実施し、その執筆は、第一章・第二章を出宮徳尚、第三章を根木修・出宮が担った。
3. 遺構実測図の浄写は、神谷正義・出宮が行い、遺物の整理・実測及び実測図の浄写は、岡崎真・松田順子、安田利之・神谷・根木が行った。遺物の写真撮影及び編集は、出宮が担った。
4. この報告書に用いている高度値は、標準海拔高度である。
5. この報告書に用いているグリッド方位は、Gr， N が磁北から23度偏西である。

目

次

第一章 歴史的環境	1頁
第二章 調査経過	5頁
第三章 調査成果	9頁

挿

図

第1図 足守庄荘園跡周辺地形・遺跡分布図	2頁
第2図 地元見学会	7頁
第3図 岡山市上土田、延寿寺跡地形測量図	挿頁1
第4図から第13図、各トレンチ壁面実測図	挿頁2
第14図 W-NVT 配石土壇墓実測図	12頁
第15図 W-NVT 井戸実測図	14頁
第16図 遺物実測図	17頁

図版第1 備中国足守庄図

図版第2 全 景

図版第3 溝 遺 構

図版第4 中 世 墓

図版第5 中 世 墓

図版第6 中 世 墓

図版第7 中 世 墓 他

図版第8 中 世 溝

図版第9 井 戸

図版第10 井 戸

図版第11 遺 物 瓦

図版第12 遺 物 早 島 焼 他

図版第13 遺 物 小 皿

図版第14 遺 物 土 器 類

図版第15 遺 物 そ の 他

図版第16 榜 示 遺 構

図版第17 榜 示

第一章 歴史的還境

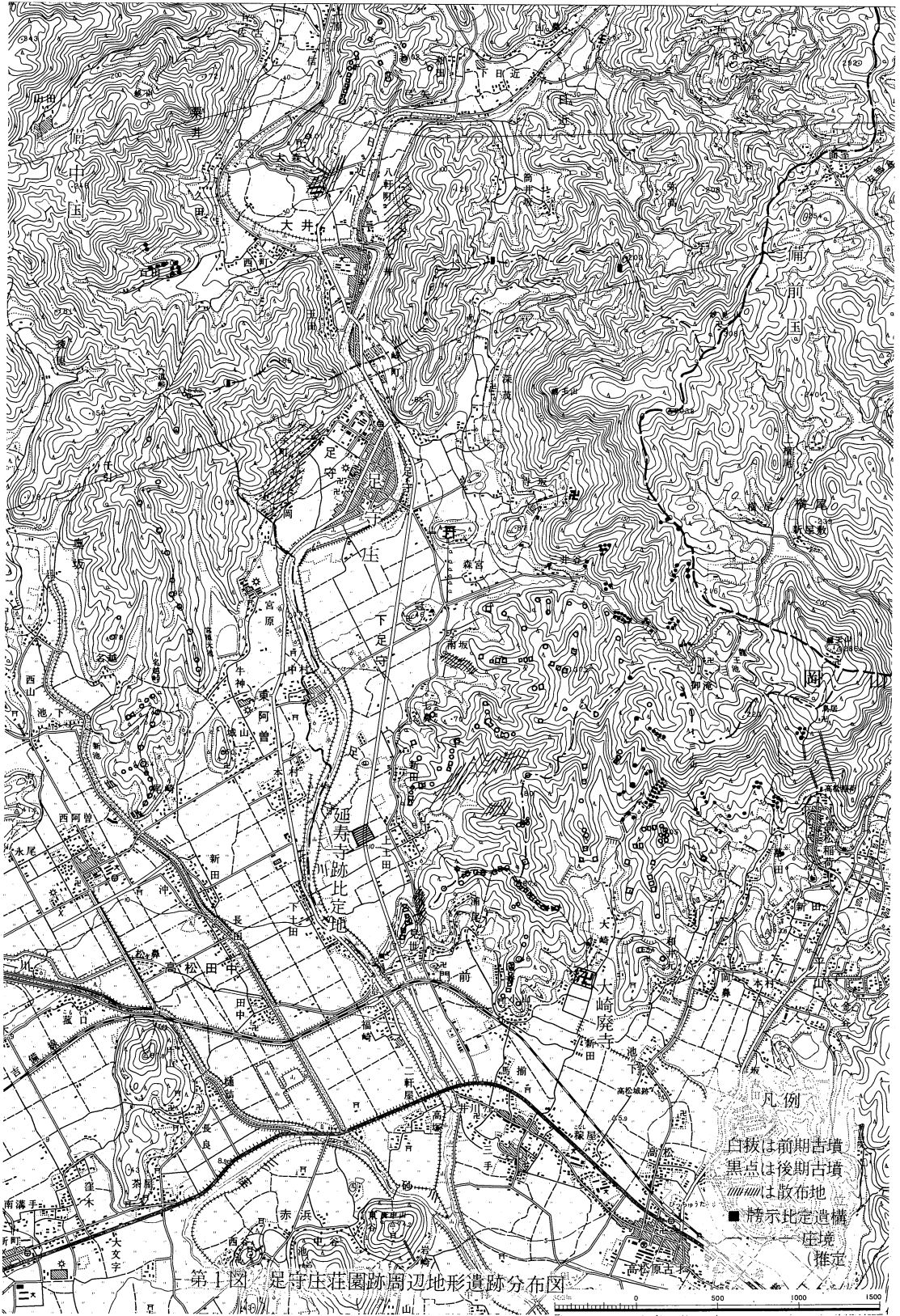
足守庄は、北部の吉備高原南端の入り込んだ谷から南部の備中国南東部沖積平野（旧高梁川分流流域平野部）へ流れてた中小河川大井川（現足守川）下流の左岸の平野とその周辺丘陵に形成された荘園で、律令制の備中国賀夜郡足守郷全域を占めていたと推定される。備中国南東部を本拠地にして国造から郡司層となった吉備一族とされる古代豪族の加夜氏（賀陽）が、平安時代後半に、かつての本拠地の一つであったと考えられる足守郷一帯の荘園化を図ったものと推定され、嘉応元年（1169）に同氏から後白河法皇に寄進されて三代御起請地の寄進地系荘園となった。その後、後白河法皇から山城国の神護寺に再寄進され、元暦元年（1184）以降同寺の荘園として鎌倉時代から室町時代前期にかけて存続していた。嘉応元年の賀陽氏から後白河法皇に寄進した時に製作された絵図の備中国足守庄図が、神護寺に現存し、絵図に描かれている地形と現在の岡山市足守、下足守、上土田地区の地形が著しく即応している。

このたび発掘を含め調査の実施にあたった足守庄の歴史的な性格、内容を展望する前提として、足守川中・下流に形成された原始・古代の遺跡の存在状態を概括的に展望しておきたい。

現在では児島湾に注いでいる足守川は、古代には大井川と呼ばれ、古代末以降に埋没して河田となってしまったが、それ以前には総社から分かれて庭瀬（古代の吉備の津＝港）に流れていた高梁川分流に合流していた。吉備高原南部の山間を北から南に流れ、備中国南東部の沖積地で高梁川に注いでいた足守川の流域には、古墳時代を中心に古代の遺跡が一つの地域的まとまりをもって濃密に形成されており、所謂吉備政権を構成した有力部族加夜氏の本拠地の一ヶ所とされている。

足守川流域で縄文時代の遺跡は、これまでに明確な遺構が発見されていないが、吉田山（現在の足守町並の西側の山塊）山麓で、地元研究者によって流動した縄文式土器片が採集されており、この山塊のどこかに縄文時代の遺跡が存在することが確実である。また、縄文時代晩期の土器片の数点が、上土田地区の第1次延寿寺跡発掘調査で古代水田層中から流入状態で検出されており、吉備地方各地の弥生時代の中心的遺跡に見られる同時代に先行して継承される縄文時代晩期の遺跡は、足守川中流流域のどこかに存在していることも確実である。

弥生時代の遺跡は、足守川の支流の日近川と足守川の合流する中流流域や、吉田山南山麓部分、さらに下流左岸の下足守から上土田の低丘陵上に、中期から後期の散布地が確認されている。下流左岸の低丘陵に形成されている遺跡は、地形的特徴や墳丘墓・前半期古墳の系統的展



第17図 足守庄園跡周辺地形遺跡分布図

開などの形成状況から、先年調査された岡山県赤磐郡山陽町の山陽団地（東高月遺跡群の一部）の大遺跡に匹敵する大遺跡の存在も推測される。また、足守地区からは、かつて流水文の銅鐸が出土している。しかし、足守川中・下流流域の弥生時代の遺跡は、発展的に形成されていたと推定されるが、その内容と動向が検討できるほどには精査がなされていない。

弥生時代末から古墳時代前半期には、足守川と日近川の合流地点北方の丘陵上や足守川下流左岸の丘陵上に、墳丘墓及び古墳群が集中して造られている。特に後者は、数基の前方後円墳前方後方墳を盟主的に伴う二系列の古墳群を中心に、7ヶ所の系列的小古墳群（支群）が形成されており、総数100基を越える一大古墳群・吉備の中核地の一部であったことを示すものであるが、南部の一部は、高梁川分流左岸に伴う古墳群に含まれるものもある。これらの古墳群の内には、特殊器台、特殊壺を伴う墳丘墓の系列もあり、弥生時代末期から古墳時代へ歴史的展開を示す重要な古墳群である。しかし、足守川流域の古墳群は、築造状況が極めて在地的であり、一基の大型前方後円墳をも析出できておらず、吉備の政治権力（政権）での位置付けに重要な問題点（在地性）を示すものである。

古墳時代後半期には、足守川上流や日近川の上流の山間部・日近川下流域・足守川下流の丘陵谷部に極めて集中した古墳群を形成しており、後期古墳は特定地点に偏る傾向がある。特に、足守川上流と日近川上流の山間部には古式の横穴式石室や炉（製鉄＝タタラ？）に伴うと推定される古墳など南部沖積平野に伴う古墳と趣を異にした築造状況の古墳が所在している。この山間部山頂に点々と箱式石棺を内部主体とする小形円墳があり、あるいは、これらの後期古墳に先行するかもしれない。また、足守川中流背後の三井谷には一大古墳群がまさに「王家の谷」のように集中して築造されており、この内の一基から家形石棺を出土している。三井谷の古墳群は尾根を境に横尾（旧一宮町分）の古墳群と背合の状況にあり、後に備前国となった横尾の小盆地の古墳群も、あるいは三井谷を経由して形成・展開されたものかも知れない。いずれにしても古墳時代後半期以降の足守川流域は、後に賀夜郡となった地区内では、古墳群の形成状況が優位な地にあり、同じく屈指の古墳群を形成している南東隣りの旧高松町北西部と一体になって、吉備氏一族であり、国造となった賀夜氏の本拠地をなしていたものであろう。

白鳳時代から奈良時代にかけての遺跡は、前記の様に前代に著るしい遺跡群を形成した割には古代寺院等の顕著な遺跡が見当らず、激減状況にある。この近くでの古代寺院は、足守川下流左岸の丘陵を隔てた旧高松町側の山麓部に所在する白鳳時代創建の大崎廃寺であるが、地形的に足守川流域に直接伴うものでない。なお 余談ながら、足守郷は、日本書紀応神紀22年の条に記載されている、誉田別（応神）天皇と吉備氏の結び付を示す伝承の舞台、葉田の葺守宮の比定地である。宮の所在の是非は別として、この地が古代史の展開に重要性を担った地域であることには間違いのないであろう。

平安時代以降の遺跡は、前記の足守庄関連遺構と銘文を伴う石造物等が確認されている。足守庄図に記載されている地形と、現在の足守川東岸一帯の地形や水田区割が著るしく即応し、記入されている三井寺、王子堂、八満山、八満宮、吉田山、藤木山等の寺社名や地名は、字名や石造物の銘文として現在にまで伝わっている。特に、庄図に中心的に描かれている延寿寺は、比定位置に堂の本、堂の前、倉ヶ市等の寺院関係字名が残り、礎石や瓦の出土等の考古資料からの確証に欠けるものの寺院社の存在が強く想定され、幻の寺とされていた。また、庄図記載の八満宮の後身とされる足守八幡宮の参道入口に建てられている鳥居には、「康安元年辛丑十月二日 願主」「大工 沙弥妙阿」「神主 賀陽重人」「祝師 僧頼澄」の銘文があり、莊園と賀陽（加夜）氏との繋りを示している。さらに現在は、山麓に所在する石造宝殿には、「暦応元年戊寅十一月二十二日」「王子○○○……」の銘があり、この宝殿は、本来現在地の東の山上にあったとの伝承があり、庄図に記入されている王子堂の比定位置に対応するもので、「王子」の銘も王子堂の名に由来するものであろう。さらに莊園の北東境界として記入されている大井御庄堺藤木山の現対応地には藤木山の名が残り、尾根上に「立石」と呼ばれる巨大な石積遺構が残存している。

なお、足守川流域に直接伴う遺跡ではないが、足守川右岸の低丘陵を隔てた西方背後の吉備高原南端山塊山頂には、近年脚光を浴びだした古代山城の鬼城山城跡が所在する。鬼城山城跡の石塁に立つと、一望のもとに足守庄跡全域が見わたせる。また、備中国国府は、足守庄南西隅から、南西約3.5kmの至近距離にあり、律令制では同じ賀夜郡内に形成されている。

第二章 調査経過

岡山市足守・下足守・上土田地区は、地形が嘉応元年（1169）に製作された備中国足守庄図と著しく即応し、特に条里制水田区画は、同地区から総社市東部（備中国南東部）沖積平野にかけて郡単位の規模で条里制が残り、吉備地方でも条里制が平野単位で把握できる屈指の地域である。この古代地形と水田形状を現代にまで良好に伝えている足守・下足守・上土田地区に、急激な土地、特に平野部分の変革（開発）を波及させたのは、足守川右岸に沿っていた県道岡山加茂川津山線のバイパスが、左岸平野部分の中央を縦断して設定されてからである。このバイパス設置計画は、旧足守町時代の昭和44・45年頃に岡山県土木部によって立案され、昭和45年頃に着工されたもので、延寿寺跡比定地をも完全に縦断する結果となっていた。道路設置に伴う文化財の保存に行政的考慮をほとんど払うことなくバイパス路線決定と道路工事が施工されたようで、足守庄荘園遺跡をはじめ、埋蔵文化財に対する事前の調査は全く講じられていなかったようである。

昭和46年5月に、旧足守町が岡山市へ編入合併されたために、バイパス設置に伴う足守川左岸の足守庄荘園の遺構の保存対策の問題が表面化し、特に、すでに道路工事の施工されている延寿寺跡比定地の保存措置が当面の課題として提示される状況となった。しかし、この時点で、バイパスは、路線も決定されており、この延寿寺比定地を含めて一部がすでに着工済の状態にあり、有効な行政的保存措置を講じたい状況に置かれていた。また、県道設置に伴って道路周辺部の水田が、段々と宅地化されて、スプロール現象がこの地域にも及びだし、延寿寺跡比定地の一部にも宅地造成がなされるに至った。

このため、岡山市教育委員会は、足守庄荘園遺構の実態を把握するために緊急調査の実施を計画し、昭和51年度にとりあえず単独市費をもって、バイパスに切断された延寿寺跡比定地東半部分の水田を、足守庄荘園遺構の第1次調査として発掘を実施した。発掘の結果、寺域の東側と南側を画すると判断される溝や平安時代後期の瓦片を検出し、この地点に寺院址が所在していることを確認するに至った。このため、岡山市教育委員会は、延寿寺跡比定地全体の本格的な発掘調査を実施し、寺域と寺院遺構の内容を明らかにして寺院遺構の保存対策を図るとともに場合によっては延寿寺跡の記録保存を講じることを主要目的の一つとして、国・県の補助金を得て足守庄荘園遺構緊急調査の事業を本年度に実施した。従って、延寿寺跡の発掘調査に関しては、本年度の調査が、第2次調査となる。

発掘調査に先立ち、昭和53年9月以降、地元地権者と市教委との間で、発掘に伴う土地使用についての協議が重ねられ、地権者の絶大なる協力のもとに発掘調査が実施される運びとなった。また、岡山市教育委員会により昭和53年11月に足守庄荘園遺構緊急調査対策委員が委嘱され、同11月28日に調査の実施に先だって事前の対策委員会が開催され、調査目的・方法・期間等の協議が諮られた。調査は、昭和53年12月から昭和54年2月まで延寿寺跡の発掘調査を実施する一方、発掘作業終了後に足守庄荘園跡全域の分布調査を実施し、昭和54年3月31日までに全ての作業を終了する計画をもって実施することとなった。なお、昭和53年10月31日付けをもって、岡山市教育委員会教育長から発掘の通知が、文化庁長官宛に提出してある。

足守庄荘園遺構緊急調査組織

調査主体者	岡山市教育委員会教育長	橋本 進
調査顧問	岡山市文化財保護審議会会長	西原礼之助
調査対策委員	巖津政右衛門	(岡山市文化財保護審議会委員)
	小野 昭	(岡山大学法文学部助手)
	鎌木義昌	(岡山理科大学教授)
	葛原克人	(岡山県教育委員会文化課文化財保護主査)
	近藤義郎	(岡山大学法文学部教授)
	西川 宏	(山陽学園教諭)
	春成秀爾	(岡山大学法文学部講師)
	藤井 駿	(岡山市文化財保護審議会委員)
	間壁忠彦	(倉敷考古館長)
	水内昌康	(岡山市文化財保護審議会委員)
	横山浩一	(九州大学文学部教授)
調査担当者	岡山市教育委員会文化課長	植田心壮
	岡山市教育委員会文化課文化財専門監	市川俊介
	〃	文化財係長 井上甫之
	〃	主 事 出宮徳尚
	〃	〃 根木 修

調査員 富田承弘

調査補助員 安田利之
有松潤子
河本ひとみ

調査作業員 難波俊一
林 唯男
日笠金太郎
畑中三郎
難波 操
難波美子
河原貞子
藤原恵子
守安艶子
長門八千子
柏野里恵



地元見学会

調査にあたり、文化庁の水野正好調査官には現地来訪のうえ、多大のご指導・ご助言を頂いた。また、岡山市文化財モニターの的場勇氏・大倉正史氏をはじめ、地元研究者・有志諸氏の方々からも有意義なご教示とご助言を頂いた。さらに、発掘調査の実施に際して、地元上土田町内会長難波孝志氏には、非常にお世話になり、ご支援を頂いた。

なお、遺物の整理・実測図の浄写・報告書の作成にあたっては、岡山市教育委員会文化課の神谷正義氏・山陽学園教諭の岡崎真氏・岡山大学学生の松田順子君の真摯かつ絶大なる助力を得ることによって遂行された。

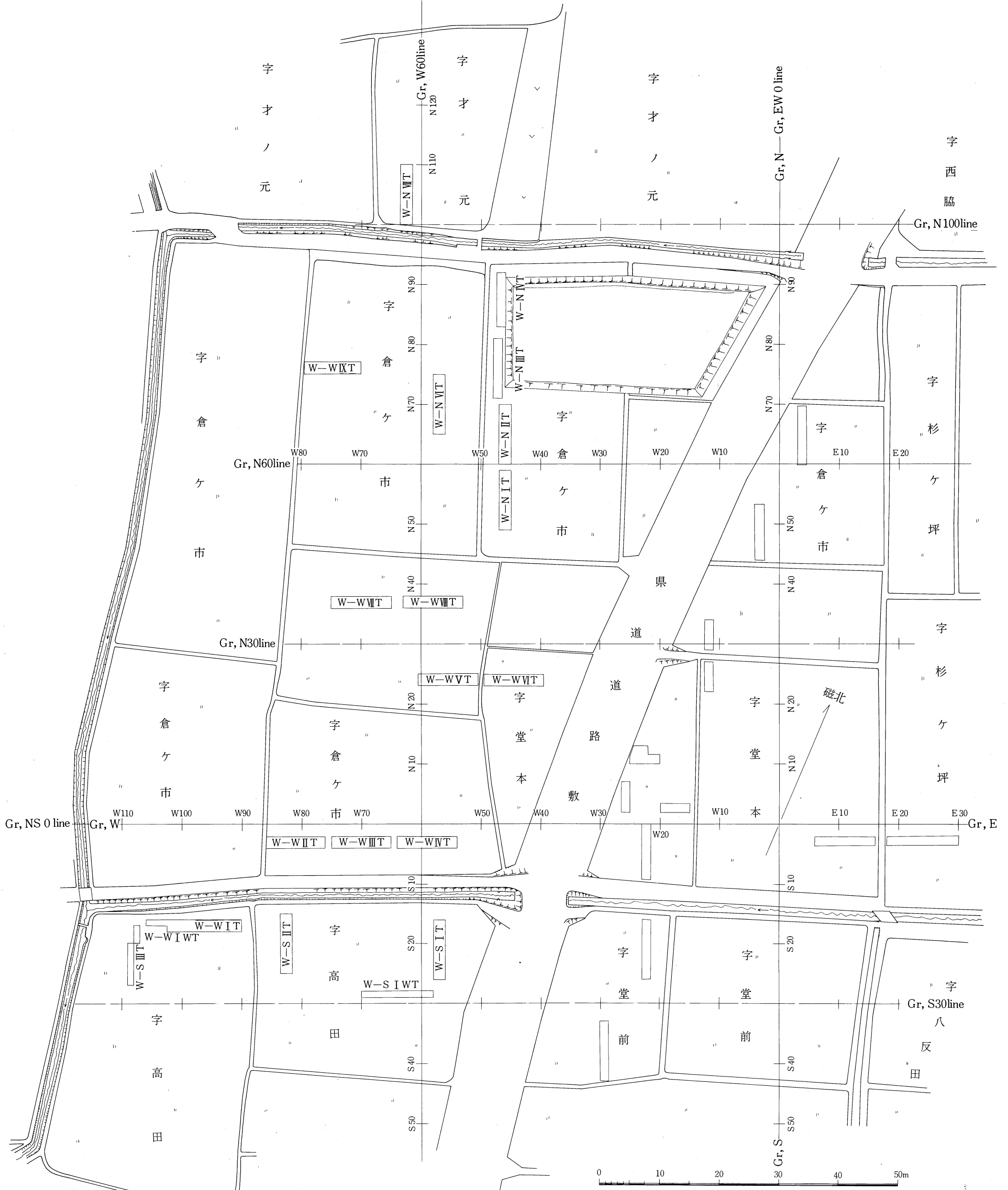
ここに、調査の終了するにあたって、本年度の調査実施に際してご指導・ご助勢下さった諸氏方々に厚くお礼申し上げる次第である。

発掘経過

昭和53年11月29日	グリッド設定
昭和53年12月1日	発掘開始 W-SIT設定
昭和53年12月2日	W-SITで寺院址南側と推定される溝底部を発見
12月8日	W-WIWTで礫の集積を確認、この下から墓壇を検出
12月13日	W-WVTで包含層の埋った溝を検出、W-WⅦ・W-WⅧTで基盤層上に点々と柱穴を確認
12月15日	W-NⅦT北端で配石遺構検出、その下部から木棺、人骨を検出
12月19日	W-NⅧTで集石を検出、下部から井戸を検出 一部のトレンチのセクションの実測を始める。
12月26日	W-NⅦTで包含層の埋った溝を検出
昭和54年1月8日	各トレンチの写真、実測
1月16日	対策委員会を現地で開催
1月20日	地元説明会、この頃各トレンチの実測
1月24日	W-WVTで溝の下部に間層（造成土）をにおいて池状掘り込み遺構を検出、瓦片や土師器、碗、植物遺体が多数出土
1月25日	一部トレンチで埋戻しに入る
2月3日	W-NⅦTの人骨取り上げ
2月7日	地形測量を開始
2月13日	東部の補助トレンチ設定
2月19日	埋戻し終了、撤去を始める。

ここに、延50日に及ぶ延寿寺跡の発掘調査が終了した。今回の発掘トレンチは、昭和51年度に実施したトレンチ名との混乱を避けるために、全てのトレンチの始めにWを付している。

2月26日以降、随時分布調査を実施し、庄図に記載してある大井御庄堺藤木山の比定地で「立石」と呼ばれる集石遺構を確認する。また、大井御庄堺丑刀勝示の遺構ではないと推定される「経塚」や、戌亥勝示跡ではないかと推定される段状になった塚状遺構を、比定地付近で確認する。これらと二つの塚状遺構は、現状では勝示遺構と明確に断定しうる状態にないが、可能性が、非常に大きい。



第3図 岡山市上土田，延寿寺跡地形測量図

第三章 調査成果

1. 調査目標

岡山市足守・下足守・上土田地区は、嘉応元年製作の備中国足守庄図に表現されている地形と現地形が即応し、地区全体が足守庄の荘域として知られていたわりには、荘園としての調査が実施されていたとはいいがたい状況にあった。県道バイパスの設置とそれに伴うスプロール化現象を契機に、この著名な荘園跡の組織的且科学的な調査の必要性が、社会的課題として表面に押し出されて来た。このたびの調査は、この社会的要求に基づき、庄図に中心的に描いてあり、これまで物的証拠に欠け幻の寺院跡とされている延寿寺を、発掘調査によりその存否を確証するとともに、荘域比定地全域の分布調査を実施することによって、庄図記載の建造物等の遺構の残存状態を全体的に把握するという二つの目標をもって実施されたものである。この二つの目標は、逆にいえば、その成果により備中国足守庄図の史料としての信憑性をも探るものであり、両者は相俟って史料的価値を高揚するものである。

2. 調査結果

(1). 遺 構

今回の発掘の結果、各トレンチで溝・池・中世墓・柱穴・杭・井戸・不明ピット等の遺構が検出された。しかし、検出された遺構は、層位及び堆積埋土との関連から寺院時代のもとの、寺院廃絶後にこの地がその安定性を利用して日常生活区として活用された時代に形成されたものと大別されるが、W - N I V T の配石を伴う中世墓を除いて、寺院址一帯の微高地が一律的に地下げによる水田化された時期に上部を削平されてしまい、その下半部が確認されたにすぎなかった。この内、寺院関係の遺構は、W - S I T で検出された溝底部とW - W V T で検出された池底部であり、一部柱穴にも寺院時代のものも含まれているであろうが、その掘り方（肩部）が削平されてしまっているために判然としない。従って発掘の目的の一つであった寺域を確定するに足る遺構は検出しえなかった。寺院後の遺構は、後に詳述する中世墓と井戸を除くと、水田用の水路と日常生活用の用排水溝、柱穴等である。水路と溝は、埋土に黒褐色有機質土を含み、寺院廃絶後の日常生活時か、それ以降のものと判断されるが、上部が削平されているため、それぞれの前後関係と時代を判断しがたい。また、柱穴は、一部に瓦片を礎盤状に底部に伴うものもあり、また、有機質土の埋詰からやはり寺院以降のものであると判断されるが、やはり掘り方の所在層が削平されていて、その時代が判然としない。また、今回の発掘が

トレンチ方式のため、柱間の組合せによる建築物を再構成するに足るだけの数的且面的な検出にまでは及んでいない。今回の発掘で検出された遺構の内、寺院関係の溝と池及び寺院以降の代表的遺構である中世墓と井戸について少し詳しく述べておきたい。

なお、この地点の基本的層位は次のとおりである。

A層＝現水田耕作土

B層＝鋤床及び現水田直下の旧水田層で明治年間の大洪水堆積砂層をも含む

灰茶褐色微砂粘土層。酸化鉄、二酸化マンガンの水平凝結の互層が数層

C層＝付近一帯が一律の平面性をもって水田化されて以降の安定継続した旧水田層で、一部土器片等の混入が認められる。灰茶色微砂粘土層。酸化鉄、二酸化マンガンの水平凝結の互層

D層＝土器片及び有機質汚染土の包含層。黒（灰）褐色微砂粘土有機質土層

E層＝寺院後の生活面に伴う2次的基盤層で、この層の上にD層及び半乾田状水田層が伴う。寺院の微高地を削平して周辺低地に埋めたと判断される薄い平面的広がりを示す土層。

黄灰褐色微砂粘土層

E層＝黄茶灰色微砂粘土層。基盤層

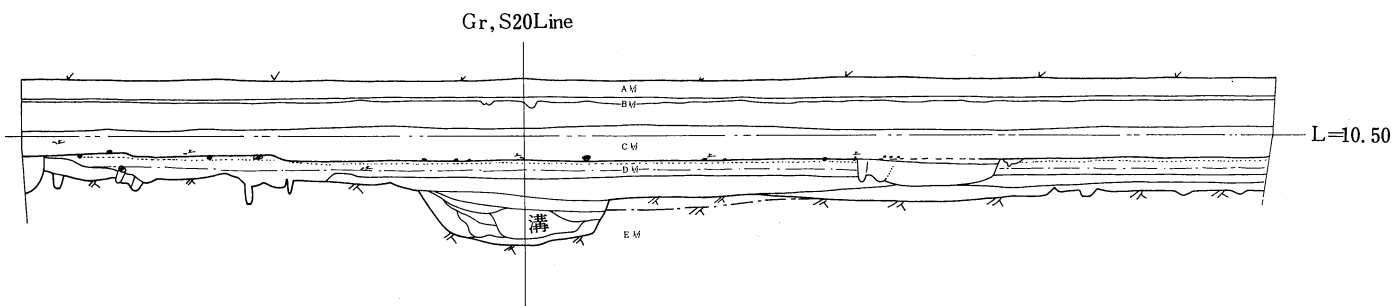
④層 E層形成以前の湿田水田層

W-SIT溝

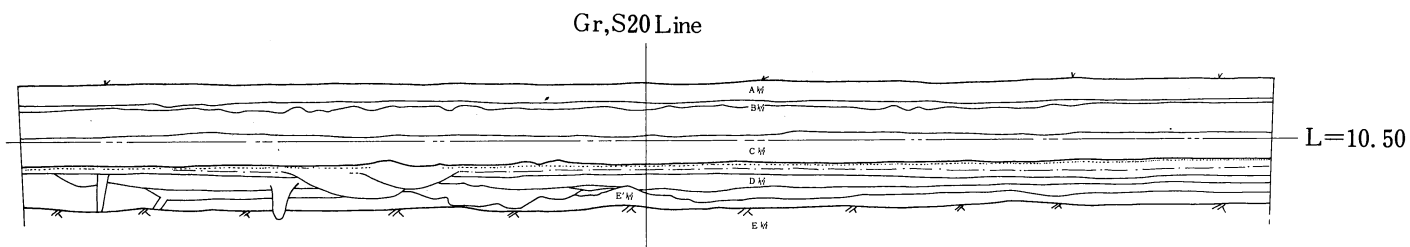
W-SITのGr、S20m付近で検出されたU字溝の底部で、才1次調査のSⅡTで検出された南側溝の西延長線上に一致する。底部の幅が1.2 mもあり、周溝状の底部と判断されるが、E層に到って検出されたもので、深さ約40cmが遺るのみで、この地点は過去にE層に達する地下げがなされていることが判明した。埋土にはD層を全く含まず、D層形成前つまり寺院時の溝と判断される。底部の規模から、溝の肩部は、底面から1.5 m程上部、L=11.00 m付近にあったと復原推定され、現水田面より高位置に寺院基礎地形上面があったと考えられる。この溝のさらに西延長を追求するために、約20m西方にW-SⅡTを設定したが、このトレンチでは溝が検出されず、W-SⅡTの西至近位置で南側溝は終わっているようである。

W-WVT池

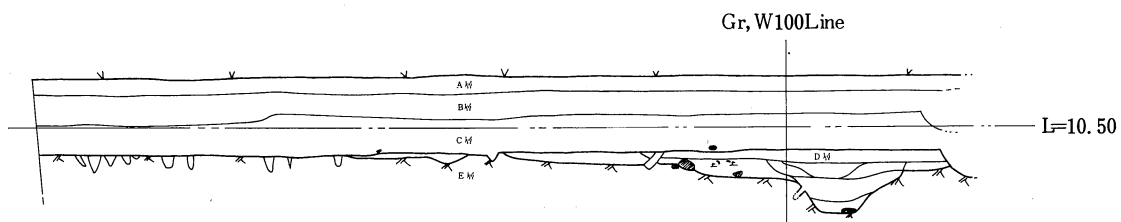
W-WVT東半でE層を大きく掘り込んだ池状遺構が検出されている。この底面直上の堆積土層中からは、平安時代末期の瓦や同時期の日常雑器とともに蓮花の種子、桃の種子を始め多くの植物遺体が検出された。池状遺構の下部堆積層は、シルト、粘土が主体で、滞水状態での堆積層の形成を物語っており、また、D層に伴う溝の様な日常生活の有機質含有土も認められ



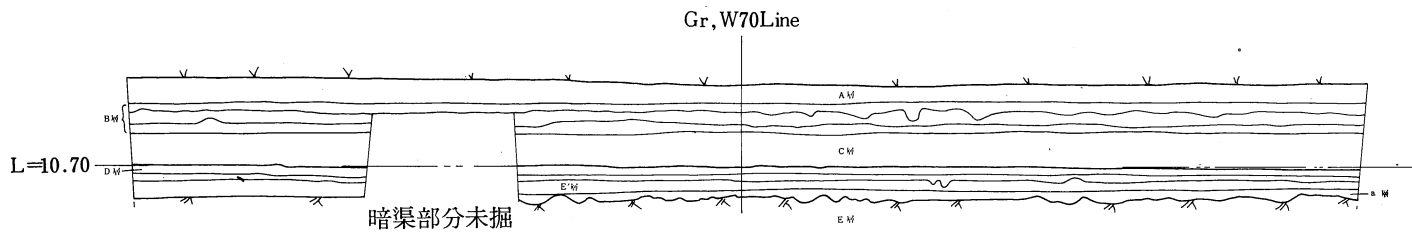
第4図 W-S I T東壁面実測図



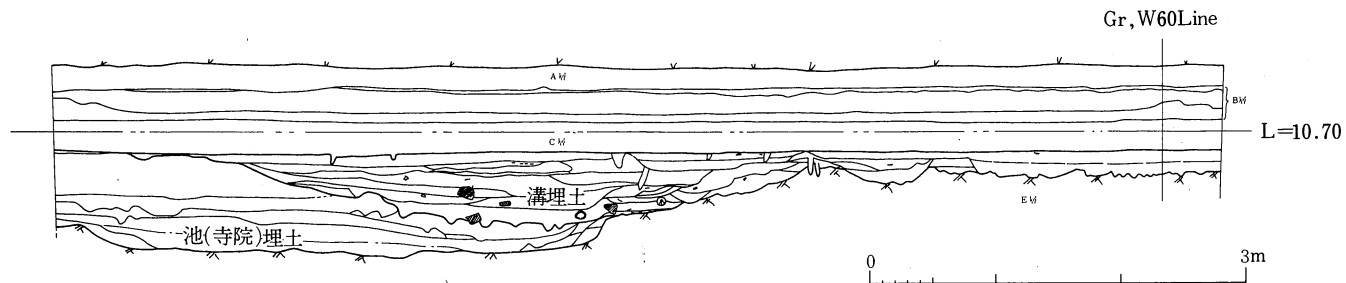
第5図 W-S II T東壁面実測図



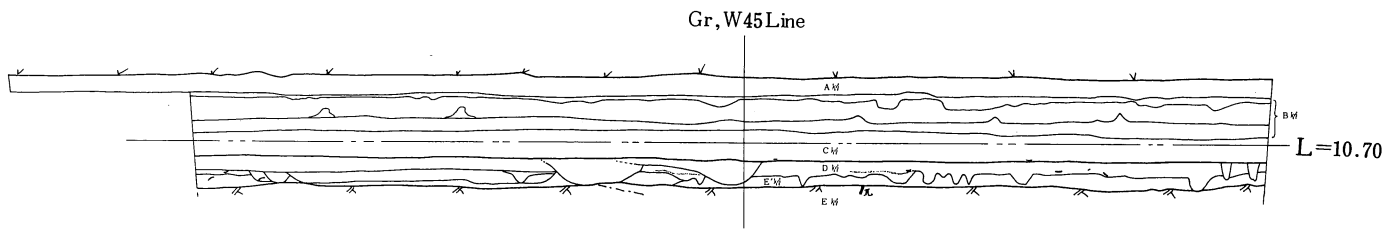
第6図 W-WI WT北壁面実測図



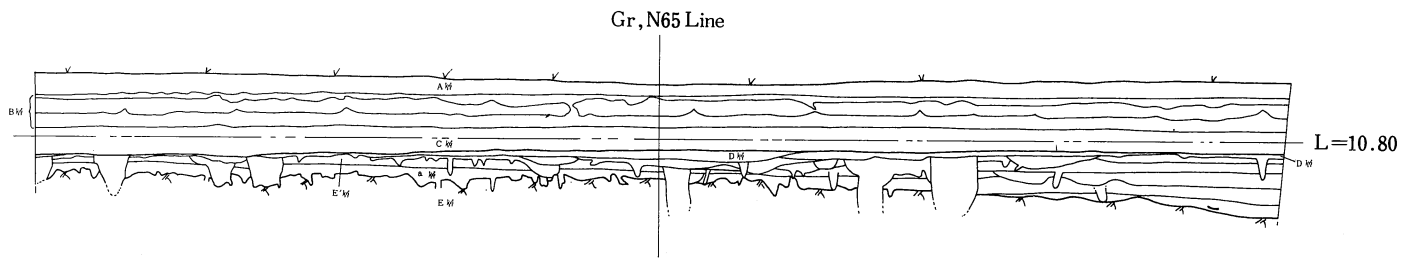
第7図 W-W III T南壁面実測図



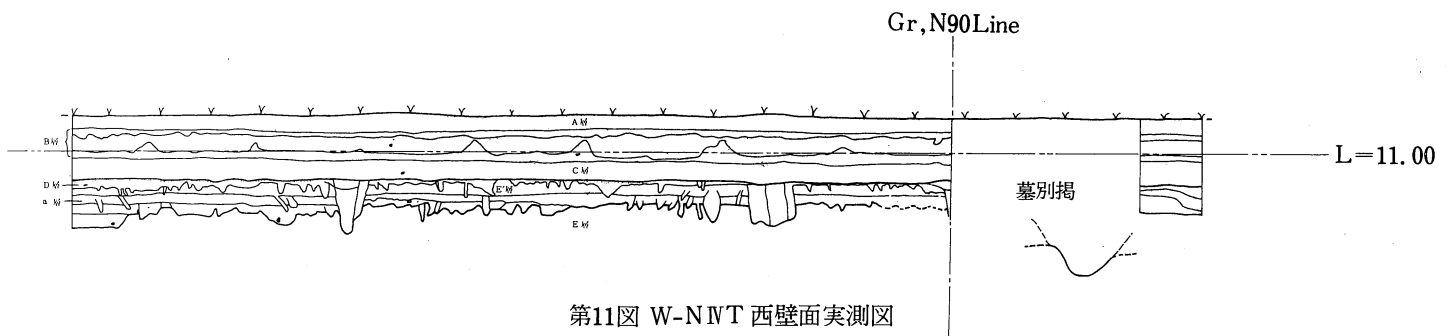
第8図 W-WVT南壁面実測図



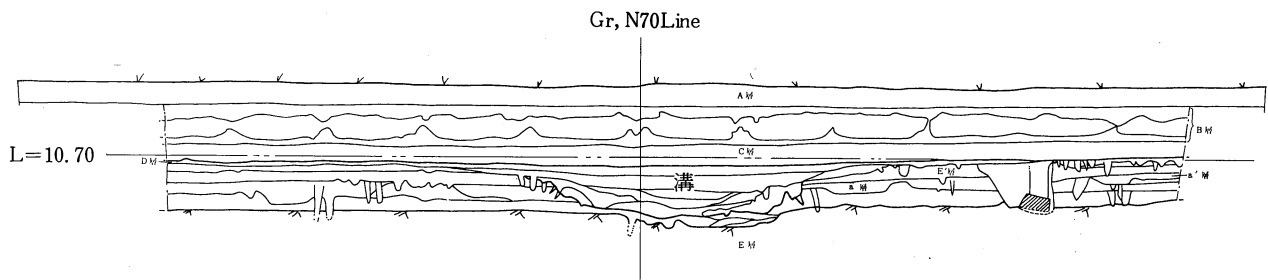
第9图 W-WⅡT南壁面実測図



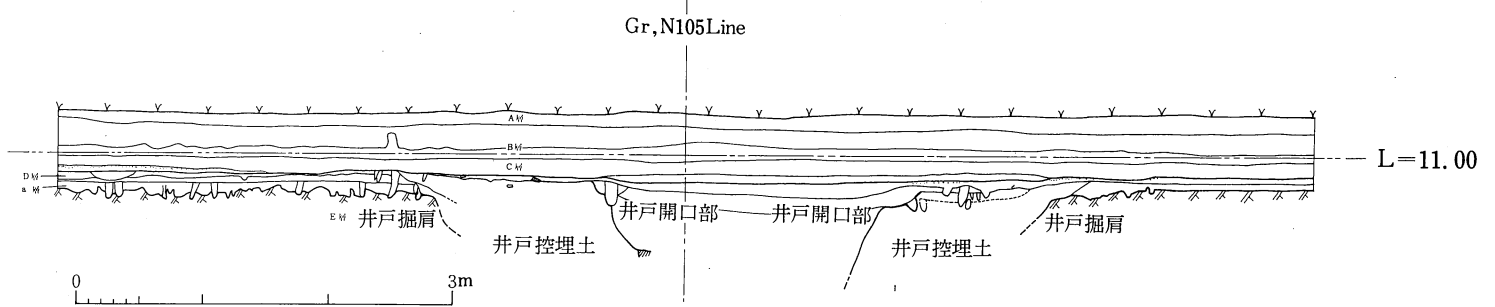
第10图 W-NⅡT西壁面実測図



第11图 W-NⅡT西壁面実測図



第12图 W-NⅡT東壁面実測図



第13图 W-NⅡT東壁面実測図

ない。さらにこの遺構の上部には、E層土壌による一括埋立造成土層が認められ、それを切つてD層を伴うU字溝が掘り込まれている。以上の底部からの遺物の出土と埋土状況から、この池状遺構は、寺院時代の池と判断され、E層の掘り方からみて、人工に設けられた池であると考えられる。この池は、平安時代の寺院にみられる境内地の池の可能性が大きいですが、今回の調査では寺院を押し切れなかったので断定しがたい。

いずれにしても今回の発掘で検出した寺院時代の遺構と断定できるものは、以上の二点であり、発掘の目的の寺域の確認にまでは至りえてない。

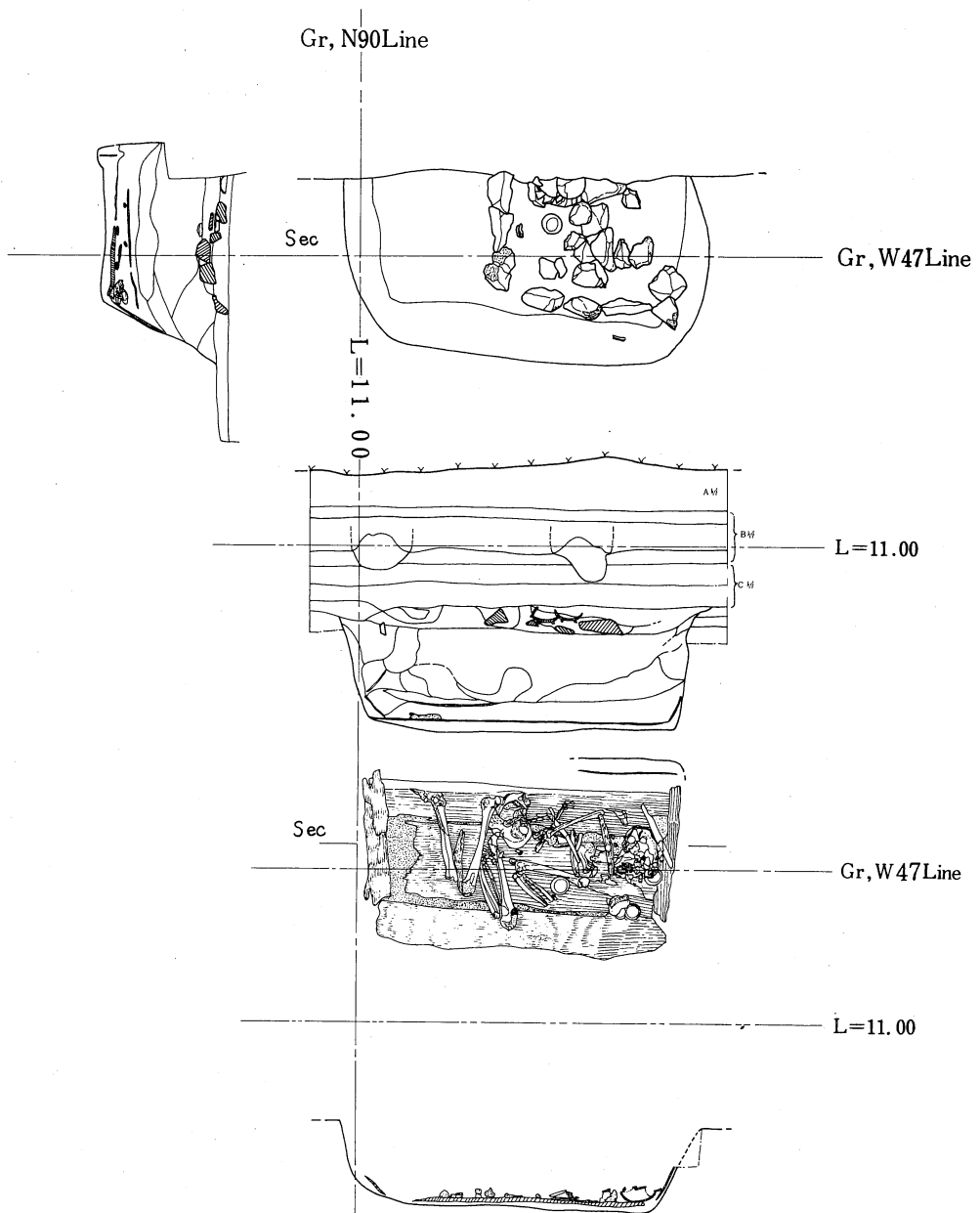
W - N IV T 中世墓

W-N IV T 中世墓は、南北に長いトレンチの北端部で検出され、墓の一部はトレンチ外であったため墓の全容を十分に明らかにすることはできなかったが、中世墓の大要をとらえることができた。

中世墓は、現耕作土下に重層的に堆積した旧洪水層や旧水田層を取りのぞいた時に確認された。旧水田層最下層にあたるD層と墓ののる比較的安定した基盤層の間に薄い洪水間層が認められ、この間層に墓の表示施設である方形配石が検出された。方形配石は、80×70cmのほぼ正方形に近い方形に10～20cm大の角礫で区画していた。区画内には、同様の角礫10数個が礫平担面を上にして一見乱雑に敷いた状態であった。敷石上面には、早島焼の碗二個が据えた状態で検出された。又、角礫の間には、土師質の小皿2枚が転落した状態で検出された。

墓壇は、上面を150×100cmの長楕円形、底面は65×125cmの長方形を呈し、深さ50cmを計り、底部からやや開きぎみにゆるやかに傾斜を持って穿っていた。墓壇内には、木棺が検出されたが、棺蓋が棺内に落ちこんだ状態であった。木棺は、全体的に腐蝕が進んでおり、底板をのぞいて横板、小口板、蓋板ともに薄くやせほそっていた。棺蓋は、底板から8～10cmの地点まで落ちこんで、人骨の上面でとまった状態であった。木棺は、杉あるいは桧材を用いて、棺底板の遺存度の良好な部分で厚1.5cmを計ったことからしておそらく厚1.5cm前後の厚板を用いて、60×110cmの長方形に組み上げた組合せ式の木棺であった。棺は、釘その他の金具や柄差し等の技法を用いて組み上げたものではなく、墓壇の側壁に横板及び木口板を立て掛けたものであった。木棺の組み上げ順序は、西横板を墓壇側壁に立て掛けて据えたのち底板を置き、両木口板を据え、最後に東横板を据えていた。箱形の木棺が組み上げられた段階で、遺体及び副葬品が収められ、最後に棺蓋が被せられていた。木棺の高さは、判然とはしないが、木口板遺存部分の最長数値からして底板上少なくとも25cm以上であったことが判明する。

墓壇内部の埋土は、墓壇を掘り上げた土を入れており、埋土中には墓形成以前の土器片が混



第14图 W-NVT 配石土坛墓实测图



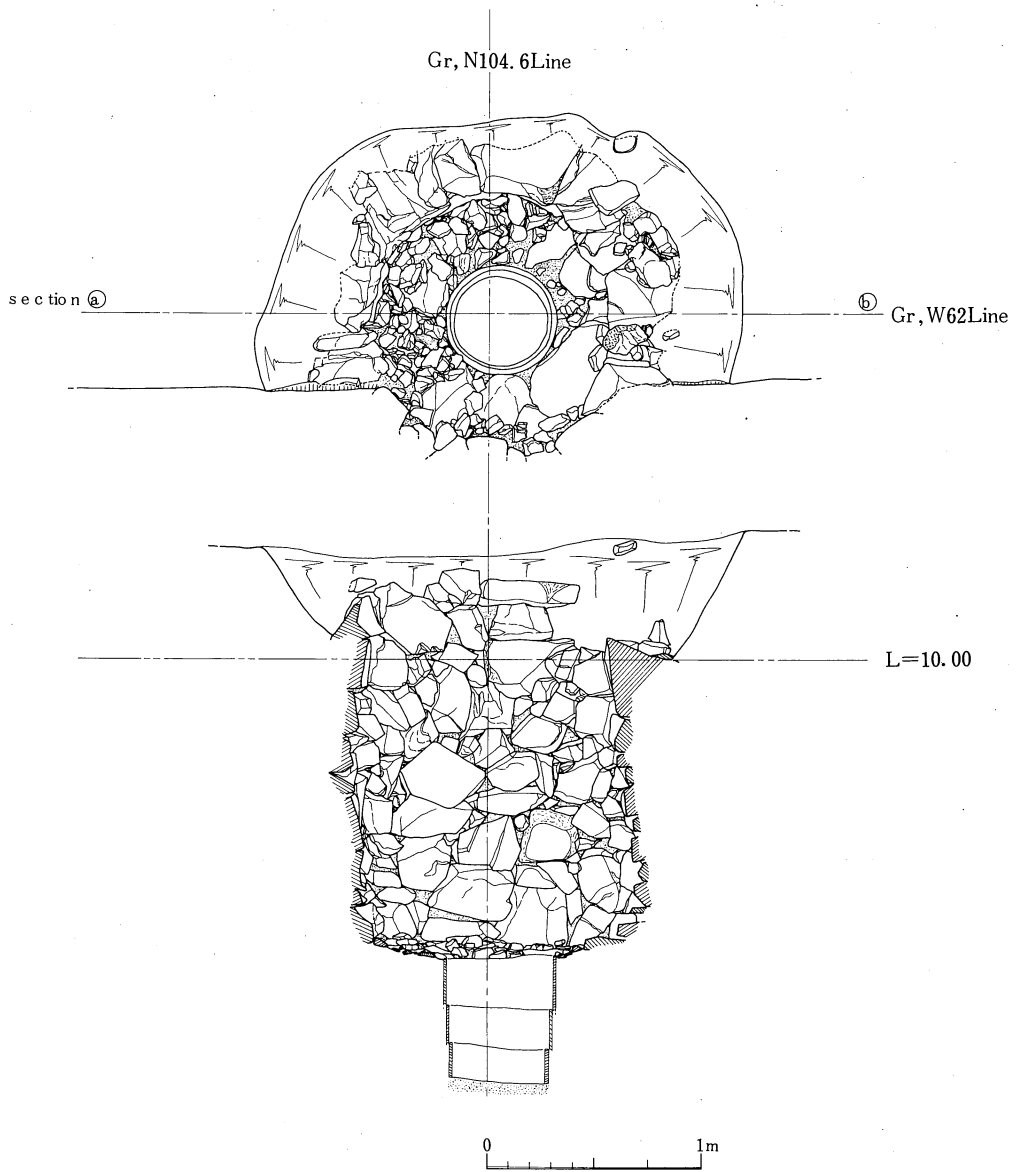
入していた。

木棺の内部は、人骨が頭部を北に足部を南にして遺存度良好に残されていた。人骨の頭部から胸部にかけては、薄板状の木質が被い、遺体の頭部には板材がのせられていたと思われる。この薄板上には、木椀1、小皿が2検出されると共に、この薄板上から転落した状態で小皿1が人骨の左腕部で検出された。この薄板を取りのぞくと、頭骨が東方に横向きで表われ、頭骨下には約30cmの鉄刀1本と1枚の小皿を伏せた状態で検出された。この小皿1枚は、頭部を固定するために置かれたものと推定された。人骨は、頭部を横にし、上体は仰向けに、両足は膝で折り曲げていた。両腕は、肘を曲げ胸前におかれていたようである。木棺内部は、木棺の崩壊時あるいは水の流入時に遺骨及び副葬品の移動がわずかに認められるが、おおむね埋葬時の状況を良く保っていたと判断された。墓の時期は、副葬品の年代観からすれば、鎌倉期の所産である。又このことは層位的在り方と矛盾するものではなかった。

W-W I W T 中世墓

W-W I W T トレンチは、補助トレンチのため東西に延びた細長いトレンチである。トレンチ内の土層は、現耕作土下に旧水田土層が重層的に形成され、旧水田最下層のD層下には暗灰褐色粘質微砂の包含層がみられ、この土層中に墓上面の角礫が認められた。包含層下の基盤土には、平面90×90cmの変形三角形をした深さ約20cmの墓壇が認められた。墓壇内には、2個の角礫がみられ、角礫上には人骨が認められ、墓壇埋土内には歯が検出され、埋葬であることが確認できた。埋葬はその形態を具体的に物語る在り方は示していないが、おそらく墓壇内に遺体を直接埋葬したものと推定される。墓は、墓壇内から時代を推定しうる遺物が一切検出されていないが、墓壇上層の層位的在り方からして鎌倉期の所産と推定された。

今回の調査で検出された鎌倉期における2種類の埋葬は、中世初期における土葬の2形態を示すものであった。W-N I W T 中世墓は、副葬品を持ち木棺に収められ、墓壇直上には方形配石が見られ、飲食物の供献がみられるなど、W-W I W T 中世墓とは明らかに隔絶した在り方を呈していた。この2者が当時の社会的身分のいずれに対応するかは不確定要素があまりに多いとしても、両者間における隔絶性からして、当時の社会的階層性を上中下の3者に大別すれば、後2者（中下）に対応するものと思われる。



第15图 W-NVII 井戸実測図

W-N VII T井戸

W-N VII T井戸は、井戸の約8割がトレンチ内に入っていたため、井戸内部は完掘することができた。井戸は、現耕作土下に重層的に堆積した洪水層及び旧水田層の最下層であるC層の直下から掘方が検出された。井戸の構築時における掘方は、井戸内径の3倍半にわたる巨大なものであった。掘方は現存部分で直径約350cmを計り、おそらく井戸基部にむかってゆるやかな傾面を形づくるものと推定される。掘方内の埋土は、おそらく掘方を掘り上げた土が用いられ、基盤土とまったく同質の土層ではあるが、鉄分、マンガンの集積がいちじるしく、全体的に黄茶色の色調が基盤土よりも強い傾向にある。又、埋土層は、モッコ等による土の移動単位と思われるブロック状の積上げ状況が認められる。埋土は、非常に堅く敲き締められており、おそらく井戸石積過程に平行して埋めもどされていったものと思われる。井戸の現存部分における最上部では、石積の裏ごめがまったく認められないことからしても、おそらく先の埋土層の入念な造りの在り方と符合するものと思われる。

井戸は、上部直径110cm、下部直径115cm、中間最大直径125cmを計り、断面、下ぶくれぎみの茄子形を呈している。石積は、大小の自然石を用いた乱石積である。石積の最下段は、井戸中央部分に沈めた円形曲げ物周辺部まで偏平な石材を用いて石積基礎部としている。井戸中央部には、曲げ物を3段にわたり沈めている。曲げ物は、杉、あるいは桧の長方形の薄板内面に斜及び縦方向に荒い刻みを入れたものを円形に曲げ、接続部分は桜皮によって結束されていた。曲げ物の各段は、いずれも3～4重の曲げ板によって構成されており、1枚1枚がそれぞれ結束されていた。曲げ物の最下段は、灰白色粗砂層の湧水層に到達しており、現在でも盛んに湧き水がみられる。

井戸内部は、青灰色粘質微砂が石積の上面までほぼ単一に堆積しており、この土層は下層にゆくほど粘質度が強まる傾向にある。内部からは、流入土器及び植物遺体及び粗朶類が認められ植物遺体の中には比較的多くの靱が認められた。流入土器は、備前焼片、亀山焼片、丹波焼片等が検出され、井戸の廃棄埋没時期が室町中葉前後と推定された。又井戸内部には、井戸の石積に使用されたと推定される大石が数多く転落（投げ込まれ？）しており、井戸埋没時に意識的に石積を崩したものと思われる。

他方、調査区内の井戸周辺部では今のところ柱穴等の遺構が確認されておらず、井戸に伴なう被屋等の施設が存在したかどうかは不明である。

(2) 遺物

今回の発掘調査に伴って、各トレンチから軒丸瓦片・軒平瓦片・丸瓦片・平瓦片・早島焼碗及び同破片、土師質小皿（灯明皿）及び同破片、小型深皿及び同破片、須恵質土器片、亀山焼

片・備前焼片・丹波焼片・磁器片・土師器片・土鍋片・石鍋片・小刀及び鉄器片・砥石・土錘・器台状土器・埋葬人骨遺体等が検出された。これらの遺物の内、早島焼碗は、乳灰色の瓦器質土器の退化した状態の土器で、広く吉備南部の中世遺跡から出土するもので、整理箱1箱分の破片が出土し、寺院後の日常生活時期の主要な日常雑器であったと判断される。出土した早島焼碗を比較観察すると3型式程に細分できそうであるが、その検討と分類・編年は、一定以上の資料の集積と分析の時間が必要であるので、本概報の段階では割愛し、今後の報告に譲りたい。また、小皿についても同様なことがいえるので、今後を期したい。さらに、他の土器類についても検討と分類・編年の作業が必要であるが、同様な理由で今後を期したい。今回の出土遺物の内で、直接寺院に伴う瓦について少し述べておきたい。

瓦片

瓦は、全て破片であり、軒丸瓦片3点・軒平瓦片1点・丸瓦片2点・平瓦片35点を数え、宇堂の本の水田周辺部から出土する傾向にあった。しかし、極めて散逸的な出土状況にあり、瓦溜りが発見されず、寺院廃止後に瓦が他へ流用されて持ち運ばれたと推定される。

軒丸瓦は、2種類の瓦当文があり、その1種は、重圏の外区の内界弁を欠く複弁の最も退化したと考えられる剣菱状レリーフの花弁があり、中房に不整形半球状蓮子を伴うもので、平安時代中期末から後期初頭の時期に推定される。他の1種類は、素文高縁の周縁の内、重圏を伴う珠文帯の外区があり、その内に蓮弁が木葉状を呈して重なり合う状態のものであるが、破片のため内区が不明である。周縁の裏側は、不整形な丸みをもって仕上げられている。文様構成・整形状態から平安時代末から鎌倉時代初頭の時期に比定される。

軒平瓦は、瓦当部分が欠落して不明。

平瓦は、上面に布目、下面に1.5cm×2cmの菱形レリーフの叩き目を残すもので、備前国の賞田廃寺出土の平瓦の内、平安時代末から鎌倉時代初期とされたものに類似し、ほぼ同時期と推定される。

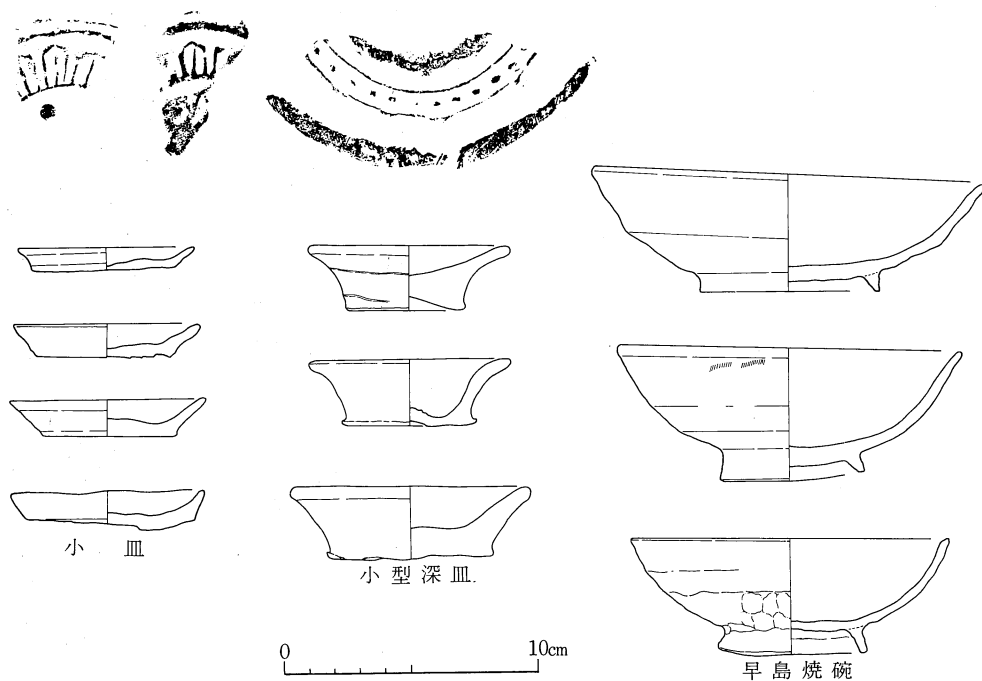
3. 総括

今回の延寿寺跡比定地の発掘調査は、寺地が過去に著しく削平・地下げをされていたために、一・二の例を除いて、明確な状態で遺構を検出しえなかった。当初の調査目標の一つであった寺域と規模の確認は、遺構の残存状況から断定するに足りる資料を検出するに至らなかったが、溝・池及び瓦片の検出から寺院の存在と年代は、確認しえた。延寿寺は、平安時代中期末から後期初め頃に創建され、鎌倉時代前期まで存続していたが、その後早い時期に廃棄されて、寺地の高まりが活用されて荘園の生産活動の生活（居住）地区とされていたことが判明し

た。この寺院は、庄図に中心的に描いてあり、荘園の形成と寺院の創建とが不可分であったと推定されるので、その年代の確定は、荘園の形成期の動向を示すものとして注目される。延寿寺が神護寺領となってから比較的早い時期に廃棄されたことは、足守庄が権門勢家の寄進地系荘園となると、寺院の存在意義の消滅を意味すると考えられる。今回の調査成果の一つとして延寿寺跡の年代が明らかにされたことは、荘園の運営経過を検討する資料を提示したことであり、今後の足守庄荘園遺構の歴史的考察に欠かすことのできないものである。寺院址の生活地区としての活用は、中世日常土器の組合せと墓制の一端を示し、荘園の研究のみならず中世史の研究に欠かすことのできない資史料を提示するものであろう。

従って、この観点からも、今後の足守庄荘園遺構の全域的調査の推進と相俟って、今回の延寿寺跡の発掘結果の十分な整理と検討に基づく本報告の作成を期したい。

なお、荘園の分布調査の結果、庄図に記入してある藤木山榜示、丑刀榜示、戌亥榜示所在地の現地地形対応地付近において、集石遺構や経塚とされる塚状遺構、土壇状遺構を確認した。これらの遺構の実態の解明をも含め、今後の荘園全域の全体的調査が待たれる。



第16図 遺物実測図

☒

版

图版第1. 備中国足守庄图



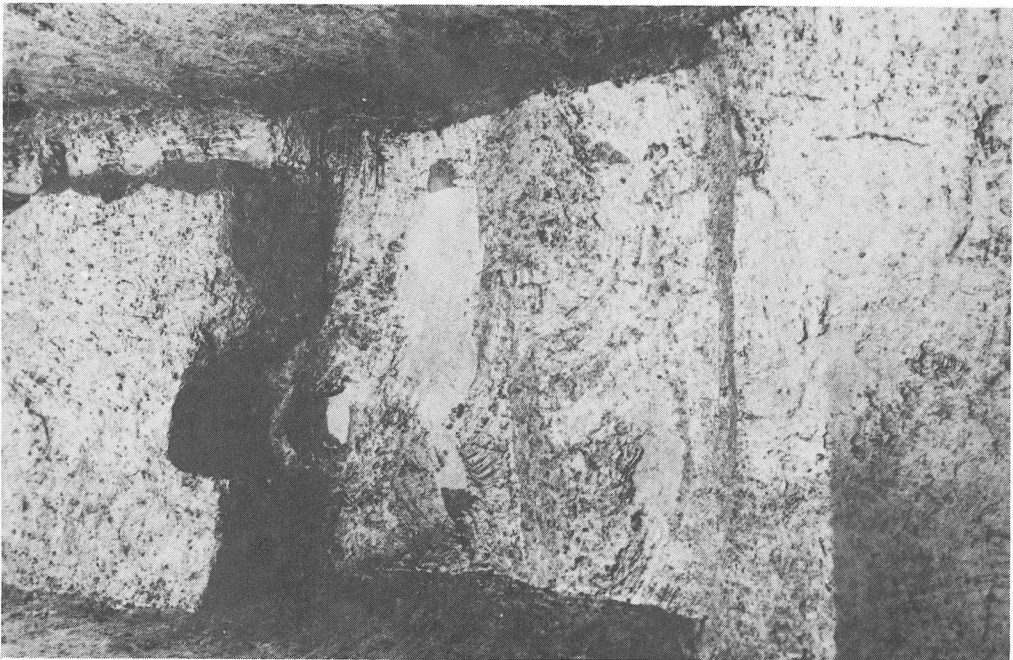
図版第2. 全景



W-S IT溝

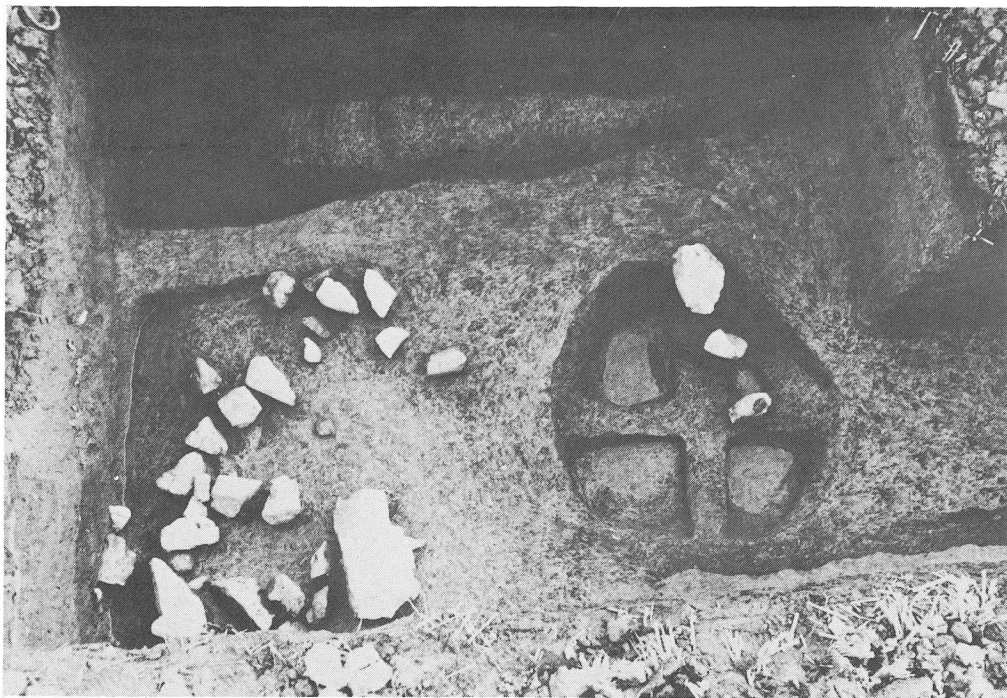


W-S I T 寺院南側溝



W-S III T 中世の溝

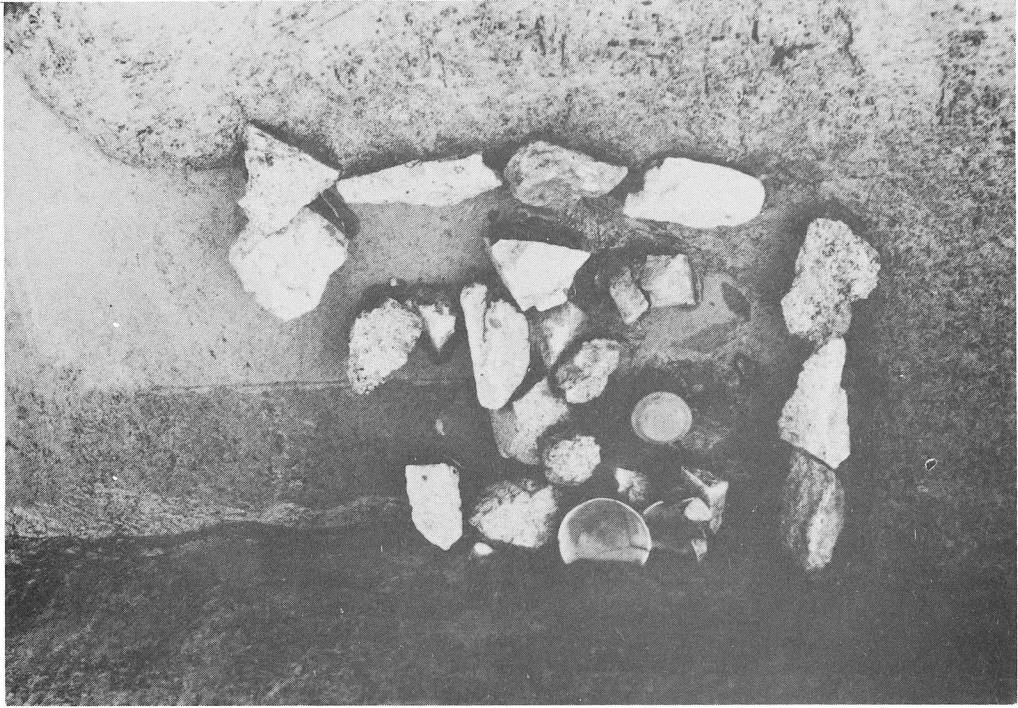
図版第4. 中世墓



W-WIWTの土壇墓



W-NVIの配石土壇墓



W-NVT 配石土塚墓



同上 木棺出土状態

図版第6. 中世墓



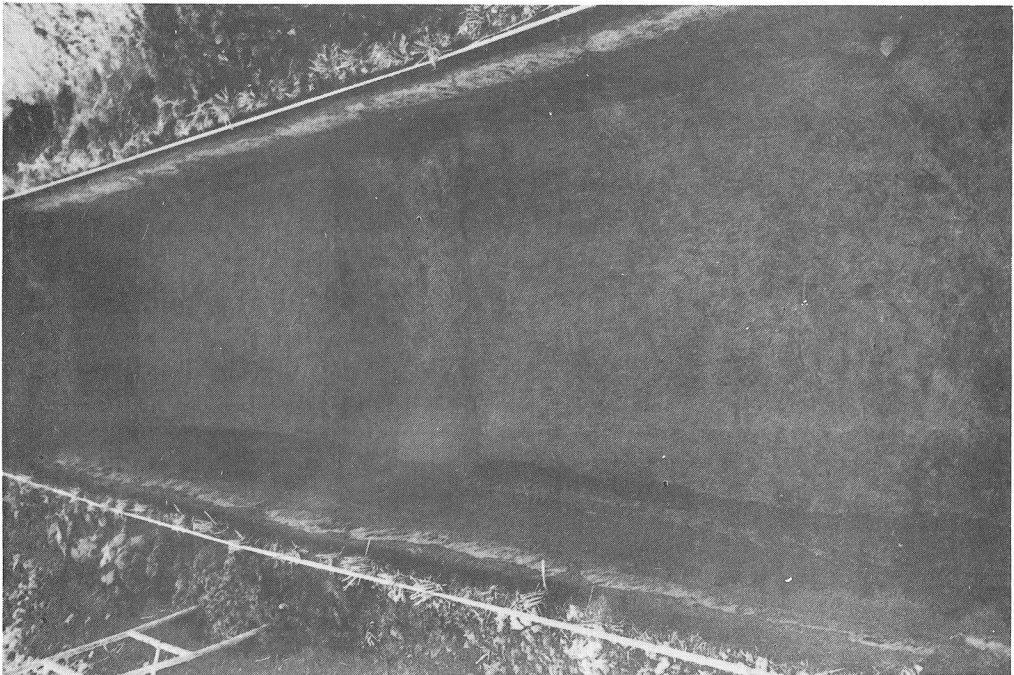
W-NIV T 配石土塚墓人骨遺体



同上 木棺底部

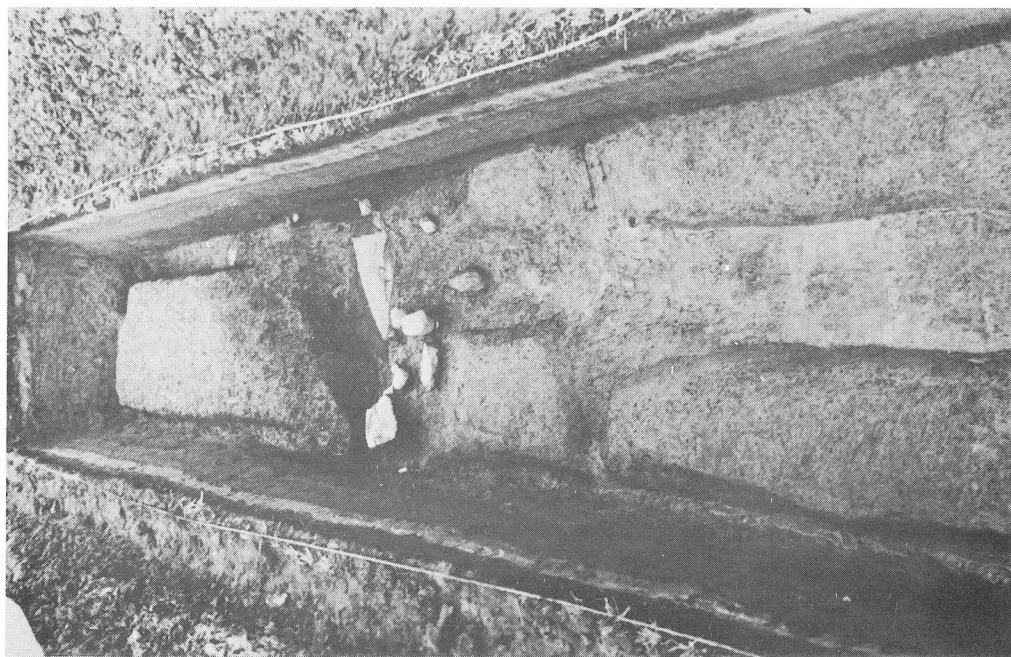


W-NIV T 配石土塚墓底部



W-N VI T 中世溝

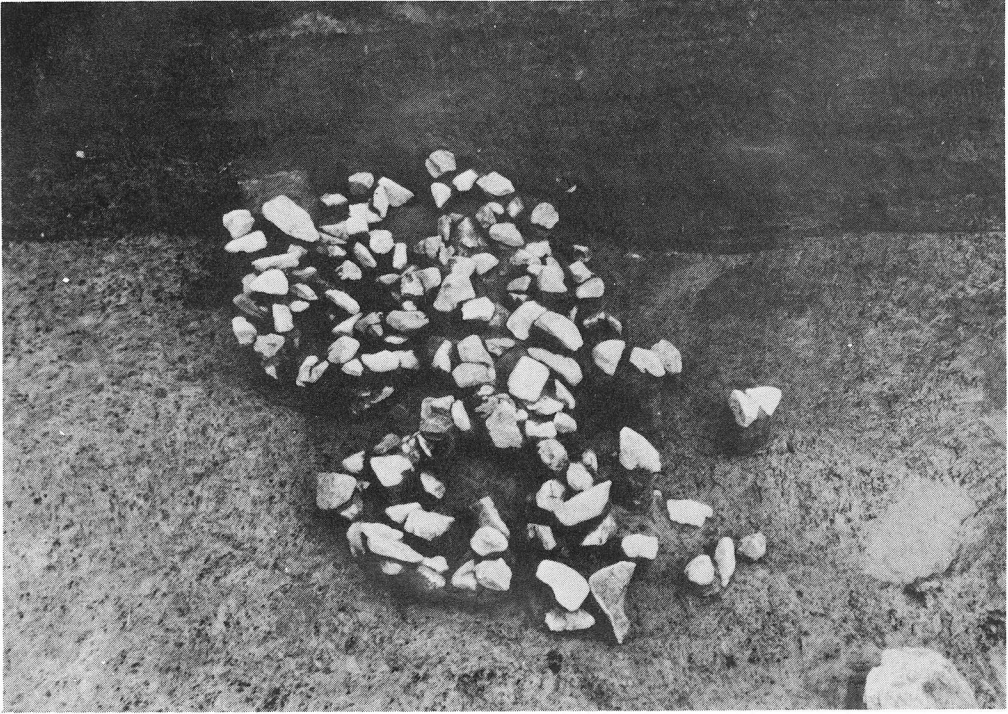
図版第8. 中世墓



W-WVT 溝水口



W-WVT 溝水口

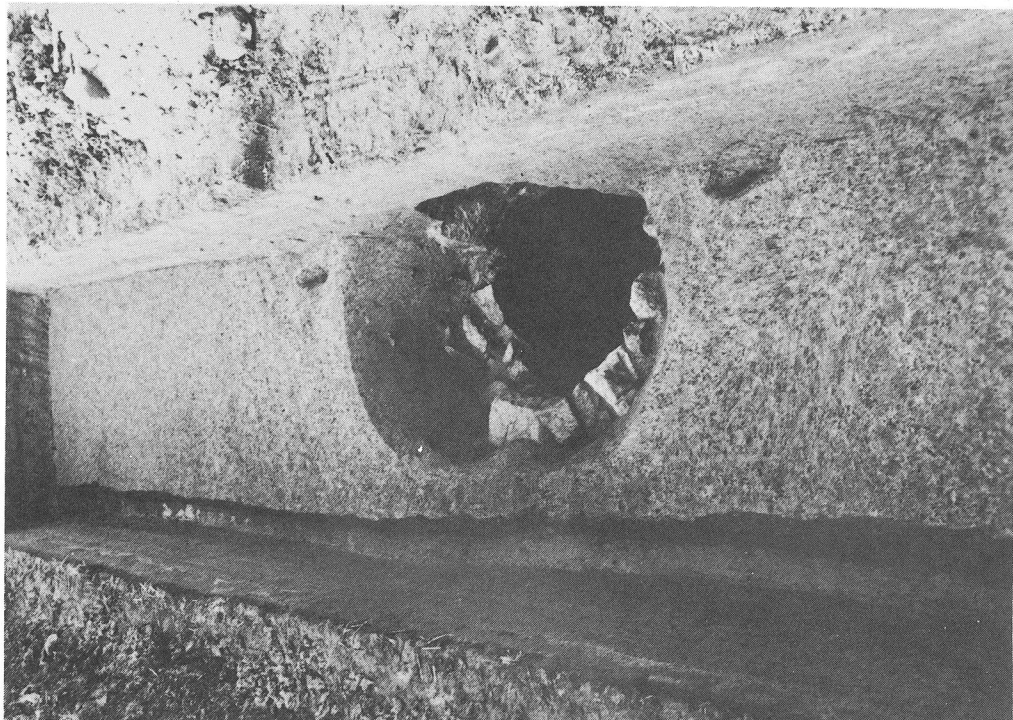


W-N VII 井戸上部



W-N VII 井戸

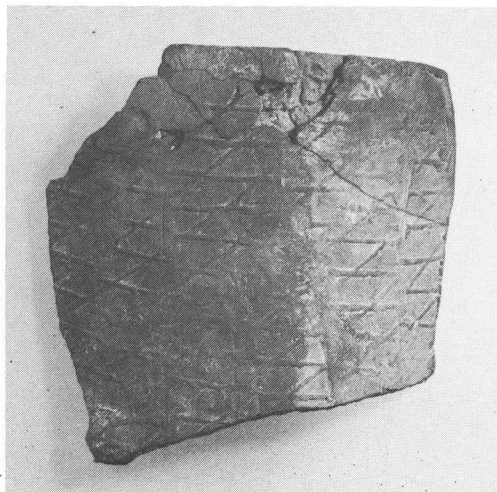
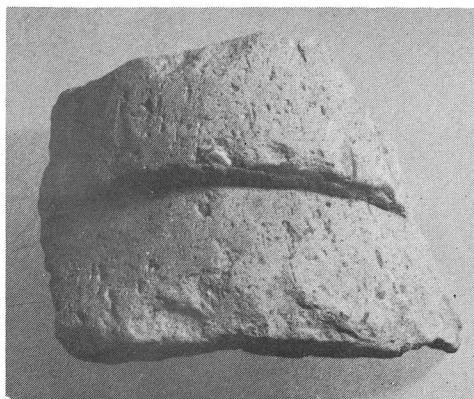
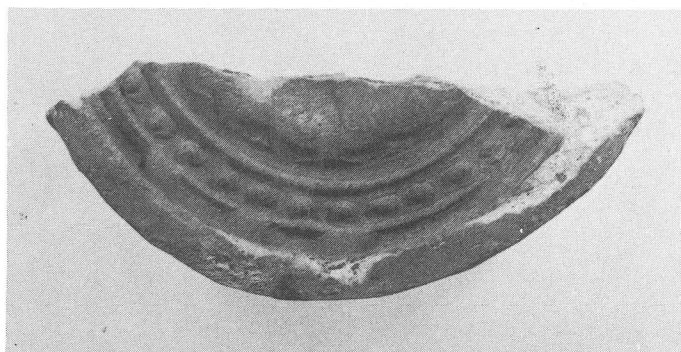
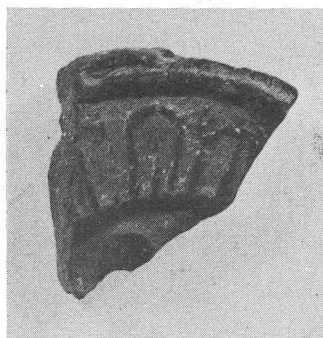
図版第10. 井戸



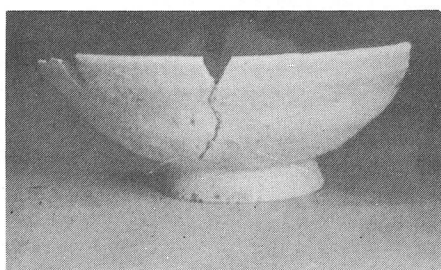
W-NMT 井戸



同上 内部



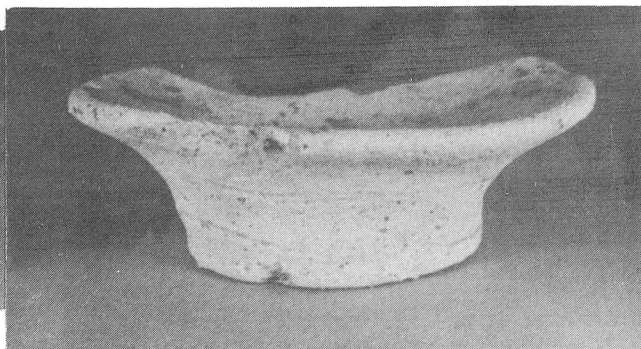
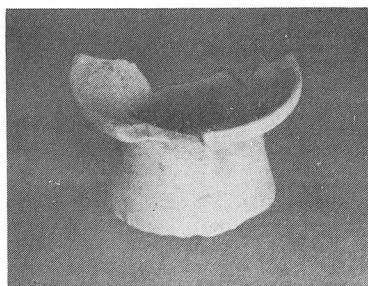
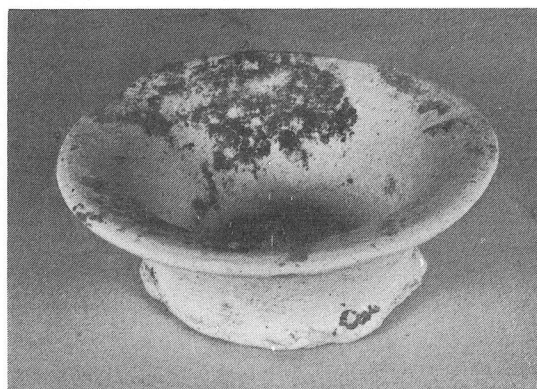
図版第12. 遺物早島焼他



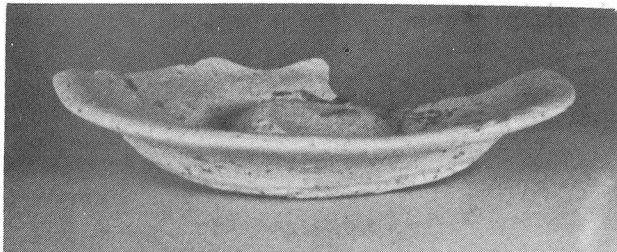
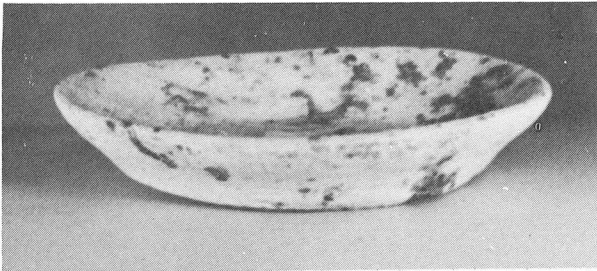
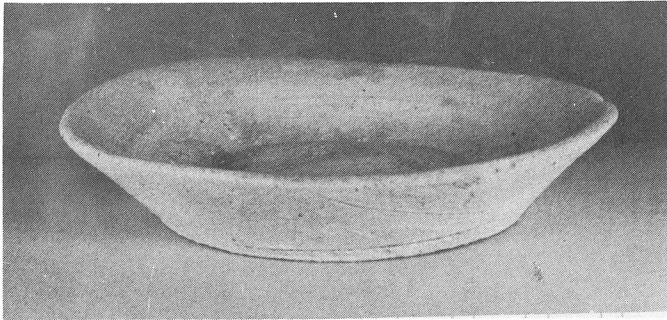
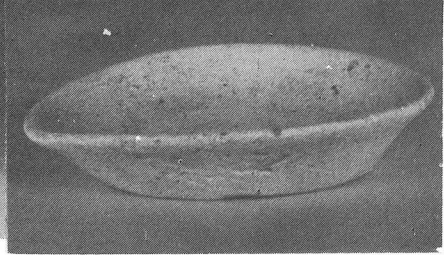
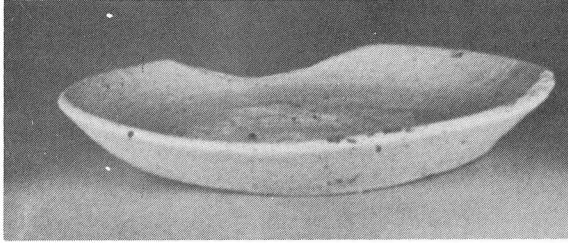
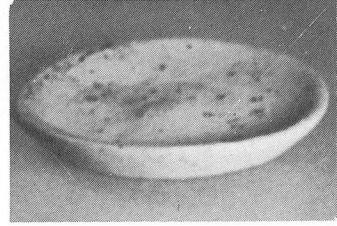
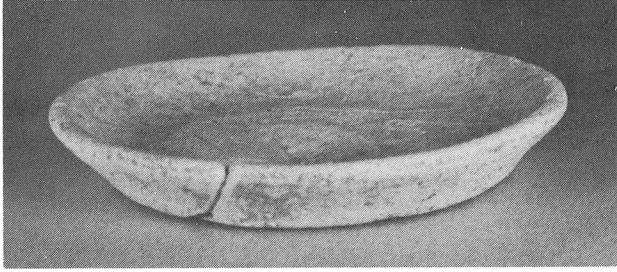
碗



小型深皿



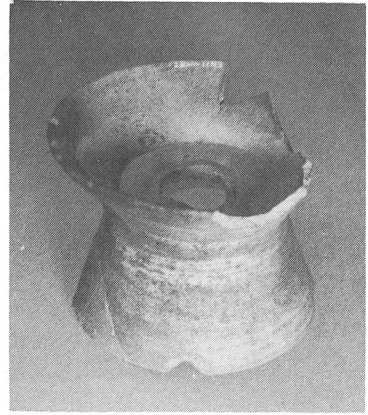
図版第13. 遺物小皿



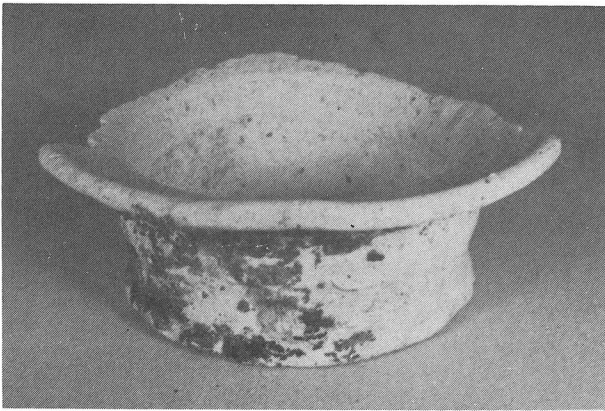
図版第14. 遺物 土器類



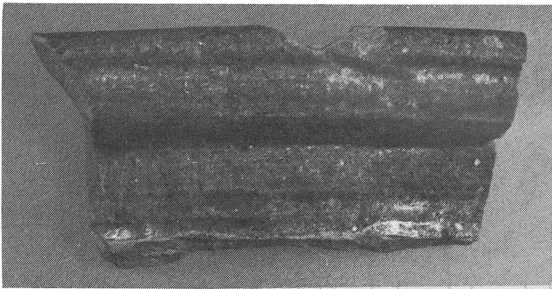
小型深皿



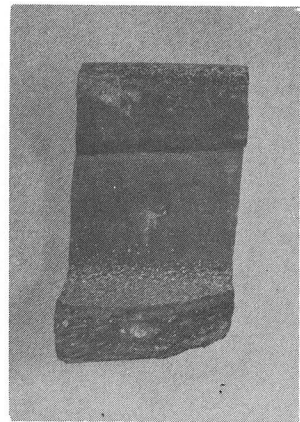
器台状土器



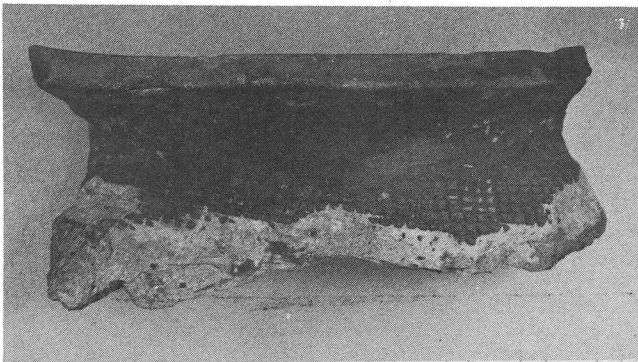
小型深皿



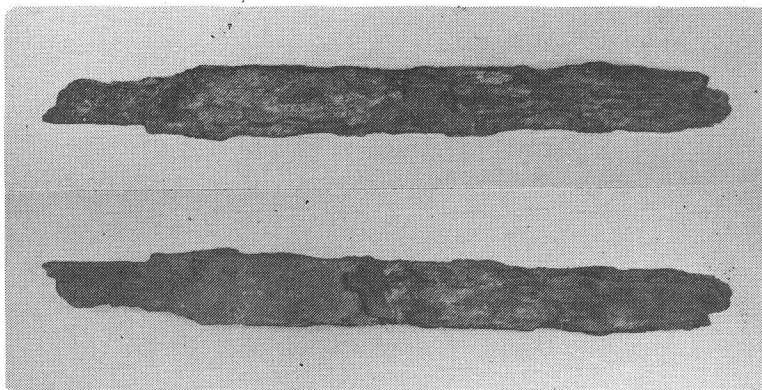
丹波焼



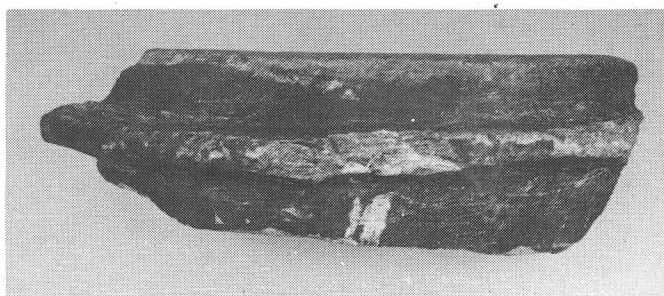
備前焼



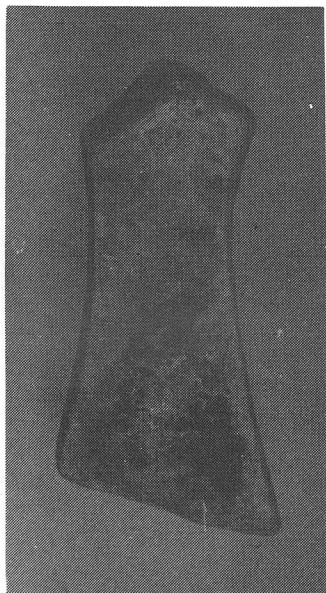
亀山焼



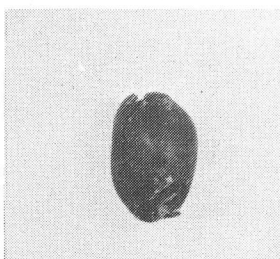
小
刀



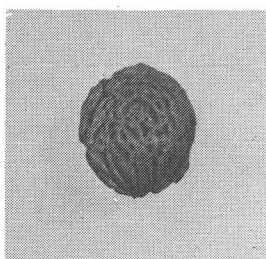
石鍋



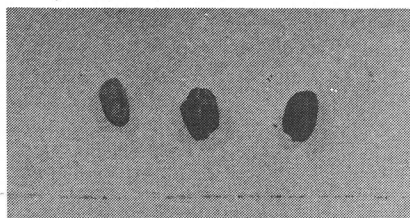
砥石



蓮種子



桃種子



炭化米



立石



立石



丑刀勝示跡か



成亥勝示跡か

足守庄莊園遺構緊急調査
延寿寺跡第2次発掘調査概報

昭和54年3月

編 集 岡山市教育委員会文化課
製 作

発 行 岡山市教育委員会
岡山市大供1-1-1

印 刷 伸 輝 印 刷